模試と同傾向の出題　～ベネッセ・駿台模試より～

政治・経済
センター試験・第４問　問６

問 6　下線部ⓕに関連して，国際分業に関する基礎理論である比較生産費説について考える。次の表は，A 国，B 国で，電化製品と衣料品をそれぞれ 1 単位生産するのに必要な労働者数を示している。現在，A 国と B 国は，ともに電化製品と衣料品を 1 単位ずつ生産している。A 国の総労働者数は 50 人，B 国の総労働者数は 10 人である。これらの生産には労働しか用いられないとする。また，各国の労働者は，それぞれの国のこの二つの財の生産で全員雇用されるとし，両国間で移動はないとする。この表から読みとれる内容として正しいものを，下の①～④のうちから一つ選べ。 32

	電化製品	衣料品
A 国	40 人	10 人
B 国	2 人	8 人

① いずれの財の生産においても，A 国に比べて B 国の方が労働者一人当たりの生産量は低い。
② いずれの国においても，衣料品に比べて電化製品の方が労働者一人当たりの生産量は低い。
③ A 国が電化製品の生産に特化し，B 国が衣料品の生産に特化すれば，特化しない場合に比べて，両国全体で両財の生産量を増やすことができる。
④ A 国が衣料品の生産に特化し，B 国が電化製品の生産に特化すれば，特化しない場合に比べて，両国全体で両財の生産量を増やすことができる。

第３回ベネッセ・駿台マーク模試・第２問　問６

問６　下線部①に関連して，リカードは国際分業による自由貿易がそれぞれの国に利益をもたらすことを理論化した。次の表をみて，この理論について説明した文章中の空欄 ア ～ ウ に当てはまる語句の組合せとして最も適当なものを，下の①～④のうちから一つ選べ。 16

	ぶどう酒１単位を生産するのに要する労働量	毛織物１単位を生産するのに要する労働量
イギリス	120 人	100 人
ポルトガル	80 人	90 人

(注) それぞれの生産には労働しか用いられない。また各国の労働者は二つの産業で全員雇用するものとする。

上の表では，ぶどう酒や毛織物を生産するのに，ポルトガルはイギリスに比べて，両方とも有利な条件で生産できる ア にある。しかし，ポルトガルは自国内で イ にあるぶどう酒の生産に特化し，イギリスは自国内で イ にある毛織物の生産に特化することで，互いに自由に貿易し合う国際分業を行い，両国に利益が生まれる。このような考え方に対して，ドイツの経済学者 ウ は，イギリスに比べて，当時のドイツのような後進国では保護貿易によって国内産業を保護する必要があると主張した。

① ア 絶対優位　イ 比較優位　ウ ケインズ
② ア 絶対優位　イ 比較優位　ウ リスト
③ ア 比較優位　イ 絶対優位　ウ ケインズ
④ ア 比較優位　イ 絶対優位　ウ リスト

今回のセンター試験の政治・経済第 4 問問 6 では、国際分業に関するリカードの比較生産費説について問われた。解答に際しては、設問文で示された比較生産費説の説明を読み解いて理解し、その条件のもとで示されたＡ国・Ｂ国の労働者数と生産量について考えることが求められた。複雑な計算などは求められていないため、比較生産費説の基本的な考え方を理解できていれば、設問文と選択肢を丁寧に読んで表に当てはめていくことで正答を導き出せた。

第 3 回ベネッセ・駿台マーク模試の第 2 問問 6 でも同様にリカードの比較生産費説を扱った。ここでも比較生産費説の基本的な考え方の理解を、教科書や資料集でよく扱われるぶどう酒と毛織物、イギリスとポルトガルを例に出して問うた。比較生産費説について考える際に用いる比較優位・絶対優位という概念の理解を求め、加えて、リカードがイギリスでこの比較生産費説を根拠に自由貿易を行うことが利益になると主張したことに対して、19 世紀当時後進国であったドイツではリストが保護貿易を重視したという視点も問うている。

いずれの設問も授業や教科書で学んだ基本的な内容を具体的な条件に当てはめて考える必要がある。原理原則をおさえたうえで、学習した内容を異なる条件や具体例で考える演習を行い、基本事項を確実に定着させたい。